

## 幼稚園教育に対する他校種を希望する教職科目履修者の関心

### －幼稚園教育要領総則の学習ニーズによる検討－

山本 奨\*

(2020年12月23日受付, 2021年1月28日受理)

#### 問題と目的

#### 1. 「幼稚園教育において育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とその後の学校教育との関連

2006年の教育基本法改正及び2007年の学校教育法の改正を受けて改訂された幼稚園教育要領(文部科学省, 2017a)では、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」として、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」が、新たに示された(Appendix 1参照)。これらの資質・能力は、保育所保育指針(厚生労働省, 2017)及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領(内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2017)でも示されたところであり、小学校入学前に育まれるべきものとして、共通して、位置づけられたと考えることができる。

そして、これらは小学校学習指導要領(文部科学省, 2008年)に示されている「基礎的・基本的な知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力その他の能力」、「主体的に学習に取り組む態度」に、それぞれ対応するものであり、また、中学校学習指導要領(文部科学省, 2017b)と高等学校学習指導要領(文部科学省, 2018)では、同様のことが「知識及び技能が習得されるようにすること」、「思考力、判断力、表現力等を育成すること」、「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」の表現で記述されていることから、小学校入学前教育から高等学校教育までの間、一貫して尊重されるべきものとして位置づけられたと考えることができる。

また、幼稚園教育要領(文部科学省, 2017a)では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」の10の項目が、新たに示された(Appendix 2参照)。これらの姿は、先述の資質・能力同様、保育所保育指針(厚生労働省, 2017)及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領(内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2017)でも示されたところであり、小学校入学前に習得が望まれるべきもの

---

\* 岩手大学大学院教育学研究科

として位置づけられたと考えることができよう。

これら新たに設けられた「幼稚園教育において育みたい資質・能力」は幼児に対する指導であり、その結果として習得される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、小学校入学のレディネスに関する査定の規準だと考えることができる。

## 2. 幼稚園教育と小学校教育の接続

上述のとおり、幼稚園教育における指導及びその習得が望まれる姿は、園の種類に関わらず共通のものとなり、併せて、小学校入学前教育から高等学校までの学校教育には、一貫性の確保が図られるところとなった。

そして、その最初となる幼稚園教育と小学校教育の接続については、小学校学習指導要領(文部科学省, 2017b)の「総則」の「第2 教育課程の編成」に、「4 学校段階等間の接続」の項目が設けられ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施」することとして定められている。これを実現するために、各小学校では、入学した児童が順調に学校生活に適応できるよう第1学年入学当初、「スタートカリキュラム」が編成されている。

さらに、幼稚園教育要領(文部科学省, 2017a)の「第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」の「第1 指導計画の作成に当たっての留意事項」の「2 特に留意する事項」の(5)には、「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど、連携を図るようにすること。」とあり、適切な接続が重ねて指摘されている。

それは、小学校学習指導要領(文部科学省, 2017b)の「前文」で、児童の学習の在り方を展望するに当たり、「幼児期の教育の基礎の上に、中学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通すことを求める形で強調されていることでもある。

それを担保するために、小学校学習指導要領(文部科学省, 2017b)の「総則」の「第5 学校運営上の留意事項」の「2 家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携」の「イ」では、「他の小学校や、幼稚園、認定こども園、保育所、中学校、高等学校、特別支援学校などとの間の連携や交流を図る」こととしており、同様の記述が中学校学習指導要領(文部科学省, 2017c)や高等学校学習指導要領(文部科学省, 2018)にもみられる。このように、幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)の定めるところは、小学校の教員はもちろん、中学校、高等学校のそれぞれの校種の教員も、これを熟知することが求められているのである。

## 3. 小学校、特別支援学校、中学校、高等学校教員を希望する大学生の幼稚園教育への関心

幼稚園教育と他校種の接続の問題は、教員養成の問題と受けとめることもできる。日本の幼稚園教育と小学校教育の接続に関して、経済協力開発機構(OECD)は、その教員養成の一貫性に課題があることを指摘している(Taguma, Litjens & Makowiecki, 2012)。この課題に関して、2017年以降の幼稚園や各校種の教育要領及び学習指導要領の上述の改訂により、その改善が図られるようになったといえよう。

その教員養成において、小学校、特別支援学校、中学校、高等学校の各校種の教員を希望する大学生は、幼稚園教育に対してどのような関心をもっているのだろうか。特に、

## 幼稚園教育に対する他校種を希望する教職科目履修者の関心

幼稚園教育要領(文部科学省, 2017a)の「総則」に新たに示された「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をどのように形成しているか理解しているのだろうか。また10項目に及ぶ「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をどのように捉えているのだろうか。そして、希望する校種の教員となる学びの過程で、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に係る学びをどの程度必要としているのだろうか。また、これらは、希望する校種によりどのように異なるのだろうか。これらに関する知見は、幼稚園教育に対する理解を深めると共に希望する校種に関する学びを深化させることに資するであろう。

### 4. 本研究の目的

以上のことから、本研究では、幼稚園教育に関する学びの必要性を通して、他校種の教員を希望する大学生が、幼稚園教育をどのように捉えているのかを、希望する校種の違いを考慮しながら、明らかにすることを目的とする。具体的には、(1)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方を主成分分析によって、(2)「幼稚園教育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の希望する校種による異同を検定によって、(3)「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に与える影響をどのように捉えているのかを、希望する校種を考慮しながらの重回帰分析によって明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 1. 調査時期

2020年6月

### 2. 調査対象

教職科目を履修する大学生203名

### 3. 調査手続き

教材提供やレポート提出などを管理するラーニング・マネジメント・システムを通じて、教職科目「生徒指導・進路指導」を受講する学生に、アンケートへの協力を依頼する旨の案内を行った。アンケートは学内に設けた配布場所でその用紙を受領するか、ラーニング・マネジメント・システムを通じてそのデータを受領することとした。

アンケートの表紙で、まず、「下は、皆さん自身が、小学校・中学校・高等学校の教員免許状取得のための教職科目の学習を進める上で、幼稚園教育に関する学習がどの程度必要だと考えているのかを問うものです。」と趣旨を説明した。その上で、回答は任意であること、回答の内容や調査への協力の有無は成績には一切関連しないこと、個人を特定する分析は行わないことを、システム上の提示とアンケートの表紙で説明した。回収は、大学内に設置された提出ボックス、郵送、当該のラーニング・マネジメント・システムのいずれかによった。

### 4. 調査材料

#### (1) 就職を希望する校種

「あなたが就職を希望する校種等を、下から一つ選んでください。今、現在の気持ちです。迷っている場合も、より強く希望する方を、一つだけ選んでください。」の間によった。

選択肢は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、幼稚園、学校園以外（企業や公務員、自営等）の6件であった。

## （2）「幼稚園教育において育みたい資質・能力」

「幼稚園教育において育みたい資質・能力」として、幼稚園教育要領（文部科学省、2017a）の総則で、「幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、（中略）幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする」として示された「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3項目を取り上げた。その項目と説明についてはAppendix 1に示した。

これに関し、「下の(1)～(3)は、幼稚園教育において育みたい子供の資質・能力です。あなたが教職科目を学ぶにあたり、この幼稚園の教育について、あなた自身が、どの程度学ぶ必要があると思いますか。「とても必要だ」～「全く必要でない」の5段階であてはまる数字を○で囲んでください。なお、各枠の中は、その資質・能力の説明です。」の説明により回答を求めるものであった。回答を求めた5段階は「とても必要だ」「やや必要だ」「どちらとも言えない」「やや必要でない」「全く必要でない」で、それぞれ5-1点を与えたことから、点が高いほど必要だと被調査者が感じていることを表す。

## （3）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、幼稚園教育要領（文部科学省、2017a）の総則で、「第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである」として示された「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」の10項目を取り上げた。その項目と説明についてはAppendix 2に示した。

これに関し、「下の(1)～(10)は、幼稚園教育において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」です。あなたが教職科目を学ぶにあたり、この幼稚園の教育について、あなた自身が、どの程度学ぶ必要があると思いますか。「とても必要だ」～「全く必要でない」の5段階であてはまる数字を○で囲んでください。なお、各枠の中は、それぞれの説明です。」の説明により回答を求めるものであった。回答を求めた5段階は「とても必要だ」「やや必要だ」「どちらとも言えない」「やや必要でない」「全く必要でない」で、それぞれ5-1点を与えたことから、点が高いほど必要だと被調査者が感じていることを表す。

## 結果と考察

143名から協力が得られアンケート用紙等が回収された。回収率は70.443%であった。

### 1. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の要約

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への回答を要約するために、この10項目について主成分分析を行うこととした。固有値を手がかりに3つの成分を抽出したところ第3成分までで全体の動きの59.811%を説明することができた。これにプロマックス回転を施したパターン行列を表1に示した。

幼稚園教育に対する他校種を希望する教職科目履修者の関心

第1成分では、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、物の性質や仕組みなどを感じ取ることや、人には自分と異なる考えがあることに気付くなどの「思考力の芽生え」、社会とのつながりや役に立つ喜びを感じるなどの「社会生活との関わり」などの項目に高い負荷量がみられた。これらは、自分の外にある世界に目を向け、そこにある様々なタイプの情報に対する興味や関心であると考えられた。そこで、この成分を「外的世界への興味」と命名した

第2成分では、相手の立場にたって行動するようになることや、きまりをつくったり守ったりする「道徳性・規範意識の芽生え」、感じたことや考えたことを見つめそれを表現しようとする「豊かな感性と表現」、自分のやりたいことに向かって行動し、自分自身で健康で安全な生活をつくり出す「健康な心と体」の項目に高い負荷量がみられた。これらは、自身の内面に目を向け、自分なりの価値観の形成に着手し、表現すべきものを吟味するものだと考えられた。そこで、この成分を「内的世界の萌芽」と命名した。

第3成分では、他者や外界にあるものを感じ、それを言葉をもって表現し、接し方を考え、他者を大切にす気持ちをもって関わる「自然との関わり・生命尊重」、共通の目的の実現に向け工夫する「協同性」、自らの経験や考えを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりする「言葉による伝え合い」などの項目に高い負荷量がみられた。これらは、内的世界を外的世界に対して、言葉や態度により伝え、働きかけようとするものだと考えられた。そこで、この成分を「他者への働きかけ」と命名した。

これらの3つの成分が探索されたことから、教職科目を履修し教員を希望する大学生は、小学校入学前の子供の姿について、身の回りの事物に対して興味を持つ姿勢の習得、自らの内面を見つめ自分自身を確立させようとする姿勢の習得、他者に言葉を用いて働きかけようとする姿勢の習得の3つの側面から捉えようとしていることがうかがわれた。そして、成分間の相関は表1に示したとおり弱いもので、これらは比較的独立したものであると考

表1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の主成分分析のパターン行列

項目	第1	第2	第3
	外的世界への 興味	内的世界の 萌芽	他者への 働きかけ
08 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	0.922	-0.343	0.135
06 思考力の芽生え	0.744	0.082	0.118
05 社会生活との関わり	0.551	0.378	-0.227
02 自立心	0.542	0.449	-0.127
04 道徳性・規範意識の芽生え	-0.172	0.813	0.010
10 豊かな感性と表現	-0.022	0.652	0.278
01 健康な心と体	0.107	0.640	0.054
07 自然との関わり・生命尊重	0.064	-0.104	0.855
03 協同性	-0.125	0.325	0.563
09 言葉による伝え合い	0.205	0.162	0.495
成分相関行列	第1	0.466	0.313
	第2		0.319

プロマックス回転、第3成分までの累積寄与率：59.811%



えられた。

ここでは、尺度構成をせず、成分得点を生成し、これを被調査者の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の必要性に関する得点とした。成分得点が高いほど、それぞれの成分に関して必要だと被調査者が感じていることを表す。

## 2. 各項目及び成分得点の被調査者の希望する校種間の比較

希望する校種について「小学校・特別支援学校」, 「中学校・高等学校」の2群に分けることとした。これにあたり, 「あなたが就職を希望する校種等」の間に, 「幼稚園」「学校園以外(企業や公務員, 自営等)」を選択した被調査者11名を, この後の分析から除外した。その結果, 「小学校・特別支援学校」は61名, 「中学校・高等学校」は71名となった。

これらの群間の比較を, 「幼稚園教育において育みたい資質・能力」の3項目と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の3成分に関して,  $t$  検定を用いて行った。その結果を表2に示した。

表2 各項目及び成分得点に関する被験者の希望する校種による比較

幼稚園教育要領	項目・成分	希望する校種	<i>N</i>	平均	標準偏差	<i>t</i> 値	自由度	<i>r</i>
「幼稚園教育において育みたい資質・能力」	知識及び技能の基礎	小学校・特別支援学校	61	4.869	0.386	1.968 †	110.922	0.180
		中学校・高等学校	71	4.676	0.713			
	思考力, 判断力, 表現力等の基礎	小学校・特別支援学校	61	4.656	0.602	1.764 †	129.765	0.150
		中学校・高等学校	71	4.451	0.733			
	学びに向かう力, 人間性等	小学校・特別支援学校	61	4.557	0.866	1.279	130	0.110
		中学校・高等学校	71	4.380	0.724			
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」	外的世界への興味	小学校・特別支援学校	61	0.092	1.046	0.976	130	0.090
		中学校・高等学校	71	-0.079	0.959			
	内的世界の萌芽	小学校・特別支援学校	61	0.103	1.029	1.099	130	0.100
		中学校・高等学校	71	-0.089	0.973			
	他者への働きかけ	小学校・特別支援学校	61	0.062	0.954	0.655	130	0.060
		中学校・高等学校	71	-0.053	1.042			

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

### (1) 「幼稚園教育において育みたい資質・能力」

「知識及び技能の基礎」と「思考力, 判断力, 表現力等の基礎」では, 群間の差は有意傾向で, いずれも「小学校・特別支援学校」の方が「中学校・高等学校」よりも高かった。「学びに向かう力, 人間性等」では有意差はなかった。

「幼稚園教育において育みたい資質・能力」は, 幼児に対する指導であると考えられた。2つの項目で有意傾向となったことから, 幼稚園教育と直接の接続先となる小学校教員や特別支援学校教員を希望する大学生は, 幼稚園においてどのような指導をしてきたのかに関する情報を, 「中学校・高等学校」よりも必要としていることがうかがわれた。ここで有意差がなかった「学びに向かう力, 人間性等」は「心情, 意欲, 態度が育つ中で, よりよい生活を営もうとする」もので, 「よりよい生活」という抽象度の高いものであった。このため直接の接続先である「小学校・特別支援学校」にあっても, より必要だとは考えられなかったと推察された。それに対して, 「知識及び技能の基礎」の「豊かな体験を通じて, 感じたり, 気付いたり, 分かたり, できるようになったりする」や「思考力, 判断力, 表現力等の基礎」の「気付いたことや, できるようになったことなどを使い, 考えたり, 試したり工夫したり, 表現したりする」については, 小学校教育において, 直接的な接続が求められる具体的な指導であったと考えられ, そのために有意な差が生じたと考えられた。

### (2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

幼稚園教育に対する他校種を希望する教職科目履修者の関心

いずれの成分においても、群間の差は有意でなかった。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、その後の教育のレディネスが得られているかに関する査定の規準だと考えられる。教員養成に際して大学生が学ぶべきことについては、子供のできることとできないことを弁別する「査定」、その子供を定められた期間にどこまで成長させるかという「目標」の設定、その査定と目標の間をつなぐ指導、つまり「方策」の3側面から整理できるとされ、その中で指導方法である「方策」に注力されることが多く、必要ではあっても「査定」と「目標」の設定に関するトレーニングは十分ではなく、大学生自身にもその重要性が認識されていないとの指摘がある（山本，2020）。本来は、レディネスの査定に必要感を感じるべき小学校教員希望者が、その理解に至っていない現状が指摘される結果が得られたと考えられた。

3. 「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に与える影響の校種間比較

「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に与える影響の校種間比較を行うために、校種毎に、前者の3項目を独立変数、後者の3成分をそれぞれ従属変数とする重回帰分析を行うこととした。各変数間のPearsonの積率相関係数について、「小学校・特別支援学校」は表3に、「中学校・高等学校」は表4に示した。重回帰分析を行うにあたって、共線性の統計量にVIF（Variance Inflation Factor）を用いた。その結果、表5に示したとおり「小学校・特別支援学校」では1.750以下であり、「中学校・高等学校」では1.473以下であった。これにより、多重共線性の問題は生じていないことが確認された。重回帰分析の結果を表6に示した。

表3 小学校・特別支援学校希望者の各変数間の相関係数

項目・成分	独立変数		従属変数		
	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等	外的世界への興味	内的世界の萌芽	他者への働きかけ
知識及び技能の基礎	.447**	.222†	.420**	.424**	.360**
思考力、判断力、表現力等の基礎		.565**	.541**	.402**	.197
学びに向かう力、人間性等			.222†	.569**	.357**
外的世界への興味				.521**	.212
内的世界の萌芽					.365**

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

表4 中学校・高等学校希望者の各変数間の相関係数

項目・成分	独立変数		従属変数		
	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等	外的世界への興味	内的世界の萌芽	他者への働きかけ
知識及び技能の基礎	.475**	.463**	.256*	.278*	.586**
思考力、判断力、表現力等の基礎		.372**	.453**	.371**	.524**
学びに向かう力、人間性等			.358**	.606**	.326**
外的世界への興味				.403**	.396**
内的世界の萌芽					.276*

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

表5 多重共線性の検討結果

希望する校種	項目	VIF
小学校・特別支援学校	知識及び技能の基礎	1.253
	思考力、判断力、表現力等の基礎	1.750
	学びに向かう力、人間性等	1.472
中学校・高等学校	知識及び技能の基礎	1.473
	思考力、判断力、表現力等の基礎	1.343
	学びに向かう力、人間性等	1.324

## (1) 外的世界への興味

「小学校・特別支援学校」では、「知識及び技能の基礎」が有意傾向で、「思考力、判断力、表現力等の基礎」の偏回帰係数が有意であった。「中学校・高等学校」では「学びに向かう力、人間性等」が有意傾向で、「思考力、判断力、表現力等の基礎」が有意であった。「思考力、判断力、表現力等の基礎」は共通して有意な変数であったが、他の独立変数は校種により異なる結果となった。

## (2) 内的世界の萌芽

「小学校・特別支援学校」では、「知識及び技能の基礎」が有意で、「学びに向かう力、人間性等」も有意であった。「中学校・高等学校」では、「思考力、判断力、表現力等の基礎」が有意傾向で、「学びに向かう力、人間性等」が有意であった。「学びに向かう力、人間性等」は共通して有意な変数であったが、他の独立変数は校種により異なる結果となった。

## (3) 他者への働きかけ

「小学校・特別支援学校」では、「学びに向かう力、人間性等」が有意で、「知識及び技能の基礎」も有意であった。「中学校・高等学校」では「思考力、判断力、表現力等の基礎」が有意で、「知識及び技能の基礎」も有意であった。「知識及び技能の基礎」は共通して有意な変数であったが、他の独立変数は校種により異なる結果となった。

表6 「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に与える影響の校種間比較

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の成分	希望する校種	重相関係数	標準偏回帰係数		
			「幼稚園教育において育みたい資質・能力」		
			知識及び技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
外的世界への興味	小学校・特別支援学校	.584**	.218 †	.508**	-.113
	中学校・高等学校	.497**	-.033	.382**	.230 †
内的世界の萌芽	小学校・特別支援学校	.646**	.326**	-.037	.517**
	中学校・高等学校	.630**	-.080	.196 †	.570**
他者への働きかけ	小学校・特別支援学校	.478**	.355**	-.176	.378*
	中学校・高等学校	.649**	.433**	.316**	.008

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

これらの結果を独立変数に焦点を当てて整理すると、「小学校・特別支援学校」では、3件の重回帰分析のいずれにおいても「知識及び技能の基礎」が有意または有意傾向の独立変数であることが示された。また、「中学校・高等学校」では、いずれにおいても「思考力、判断力、表現力等の基礎」が有意または有意傾向の独立変数であることが示された。

このことから、「小学校・特別支援学校」の教員を希望する大学生は、幼児の成長について、「知識及び技能の基礎」に注目していることがうかがわれた。同様に「中学校・高等学校」の教員を希望する者は、幼児の成長について、「思考力、判断力、表現力等の基礎」に注目していることがうかがわれた。「知識及び技能の基礎」は「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする」ことであることから、体験と気付きを重視する小学校や特別支援学校の教員志望者の特質がうかがわれた。一方、「思考力、判断力、表現力等の基礎」は「気付いたことや、できるようになったことなどを、使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする」ことであることから、気付きの先にある思考や表現を重視する中学校や高等学校の教員志望者の特質がうかがわれた。



校種間で差異なく有意となった独立変数は、「外的世界への興味」に対する「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「内的世界の萌芽」に対する「学びに向かう力、人間性等」、「他者への働きかけ」に対する「知識及び技能の基礎」であった。このことから、希望する校種を問わず、思考と表現により習得が期待される「外的世界への興味」、体験と気付きにより習得が期待される「他者への働きかけ」という、指導とその習得の関係への理解が示唆されたものと考えられた。また、「内的世界の萌芽」の希望する校種を問わず要因となった「学びに向かう力、人間性等」は「心情、意欲、態度が育つ中でよりよい生活を営もうとする」ことである。「内的世界の萌芽」がよりよい生活への志向により習得が期待される機序が示唆されたものと考えられた。

#### 4. 総合的考察

本研究の目的は、幼稚園教育に関する学びの必要性を通して、他校種の教員を希望する大学生が、幼稚園教育をどのように捉えているのかを、希望する校種の違いを考慮しながら、明らかにすることであった。その結果、教職科目を履修する大学生の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え方は、「外的世界への興味」、「内的世界の萌芽」、「他者への働きかけ」の3つの視点に要約できることが示唆された。

「幼稚園教育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の希望する校種による異同については、直接の接続先となる「小学校・特別支援学校」を希望する大学生が「知識及び技能の基礎」と「思考力、判断力、表現力等の基礎」に関し、どのような指導をしてきたのかに係る情報を、より求めていることが分かった。その一方で抽象度の高い「よりよい生活」や小学校教育へのレディネスに関する情報に関する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への必要性については、履修者に理解されていない様子が示された。

「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に与える影響の、希望する校種別検討については、「小学校・特別支援学校」では「知識及び技能の基礎」が、その一方で「中学校・高等学校」では「思考力、判断力、表現力等の基礎」が、幼児の成長に影響していると捉えている様子が示唆された。また、希望する校種に関わらず共通して、「思考力、判断力、表現力等の基礎」に係る指導が「外的世界への興味」を、「学びに向かう力、人間性等」に係る指導が「内的世界の萌芽」を、「知識及び技能の基礎」に係る指導が「他者への働きかけ」のそれぞれの成長をもたらしていると捉えている様子が示された。

本研究では、幼稚園以外の校種に関する教職科目を履修する大学生も、幼稚園教育に関する情報の必要性を感じていることが示された。特に直接の接続先となる小学校教員や特別支援学校教員を希望する場合には、指導の一貫性に関する情報を必要としていた。これは現行の幼稚園や各校種の教育要領及び学習指導要領の改訂の趣旨に添うものである。その一方で、幼児や児童生徒の査定に関する必要性については、その理解が十分でないとの課題が示唆されることとなった。この課題は幼稚園教育に関する学びに留まらず、それぞれが希望する校種に係る学びにも共通するものであることが推察された。そして、指導とその成果に関し、小学校や特別支援学校の教員を希望する場合には、体験と気付きを重視する様子が、中学校や高等学校の教員を希望する場合には、気付きの先にある思考や表現を重視する様子がうかがわれた。幼稚園及び各校種の教員養成の充実に資する知見が得ら

れたといえよう。

## 文献

- 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針.
- 文部科学省 (2017a). 幼稚園教育要領.
- 文部科学省 (2017b). 小学校学習指導要領.
- 文部科学省 (2017c). 中学校学習指導要領.
- 文部科学省 (2018). 高等学校学習指導要領.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領.
- Taguma, M., Litjens, I & Makowiecki, K. (2012). Quality Matters in Early Childhood Education and Care: Japan 2012 OECD.
- 山本獎・大谷哲弘・伊藤綱俊・村上貴史 (2020). 教職大学院における子ども支援力開発実習の計画と実践, 岩手大学大学院教育学研究科研究年報, 4, 191-204.

## 幼稚園教育に対する他校種を希望する教職科目履修者の関心

### Appendix1 「幼稚園教育において育みたい資質・能力」

No.	項目	説明
01	知識及び技能の基礎	豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
02	思考力、判断力、表現力等の基礎	気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
03	学びに向かう力、人間性等	心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

### Appendix2 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

No.	項目	説明
01	健康な心と体	幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
02	自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
03	協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
04	道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
05	社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
06	思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
07	自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
08	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
09	言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
10	豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。